百々裏話（36）

おもて　あきら

【宝山寺文書について】

奈良県生駒町の宝山寺に、かつて金春大夫家に伝来していた能楽関係の文書が多数所蔵されていることは、川瀬一馬博士の『世阿弥自筆伝書集』に於ける紹介以来、広く知られていることである。

この宝山寺文書のうち、世阿弥自筆文書を筆頭とする貴重な文書を除いた雑文書の大半が、縁あって、こんど法政大学能楽研究所に寄托されることになった。近く、各方面にそのことが通知されるはずであるが、比較的研究者によく読まれているらしい「鎌仙」に、一足さきにそのことを報告しておきたい。寄托後は、若干の整理期間を要しようが、能楽研究所の他の蔵書と同様に研究者の便宜に供せられるはずであり、能楽研究の進展に益する所が大きいものと信ずる。

ところで、能楽研究所に寄托される分は、量的には宝山寺文書の大半であるが、研究者以外はさほど興味を持たないと思われる雑多な文書がほとんどを占め、宝山寺所蔵本として著名であった貴重文書は、従来通り宝山寺に残されるのである。誤解を避けるため、従前通り宝山寺が所蔵する文書の目録を左に掲出しておこう。（順序から言えば能楽研究所に寄托される分の目録を掲げるべきであろうが、あまりにも点数が多く、「百々裏話」の数十回分を費しても載せきれないのである。）

宝山寺に残される文書は総じて四つのグループから成る。その第一グループは、川瀬氏の発見直後に補修を加え、別製の桐箱に収めてあった貴重文書の類で、宝山寺文書を代表する左の諸書である。

1・世阿弥より禪竹あて書状（「きや」より）
2・　〃　　〃　（佐渡より）
3・世阿弥自筆能本「盛久」
4・世阿弥自筆能本「タヾツ」
5・世阿弥自筆能本「江口」
6・世阿弥自筆能本「雲林院」
7・世阿弥自筆能本「柏崎」
8・応永34年筆能本「知章」
9・世阿弥能本臨模本「弱法師」
10・能本三十五番目録
11・世阿弥奥書本「六義」
12・明暦二年安喜筆「六義」
13・枡型本「風姿花伝」＊
14・枡型本「至花道」（附、五位）＊
15・永享九年貫氏筆「花鏡」＊
16・文正元年禪竹筆「六輪一露秘注」
17・禪竹筆「六輪一剣之図草案」
18・康正元年宗沅筆「題六輪一剣図後」
19・禪竹筆「至道要抄」＊
20・禪竹筆「猿楽縁起」
21・室町末期筆「猿楽縁起」
22・禪竹筆「金春家之系図」
23・文明五年仙海筆「法華五部九巻書序」
24・文明十四年宗筠遠忌勘文
25・延徳三年元安筆能本「富士山」
26・元和七年筆「金春家之書物之目記」＊
27・「隆達小唄二百首」＊
28・「禪鳳能謡音曲雑談聞書」＊
29・康正三年尋尊僧正御判

以上が別製桐箱入りの分。＊印のみが冊子本、他はすべて巻子本である。別に川瀬博士が作成した巻子本の目録が同置されており、それには「遊楽習道風見抄」が入っているが、同書は昭和30年以前に散佚したらしく、現在は所在不明である。また28と29は、もとは雑文書の中に混じていたのを、昭和38年に修理して貴重本に加えたものであり、29は川瀬氏の目録にも入っていない。

第二のグループは、昭和38年前後に修補を

加えた古写謡本の類で、左の通り。これは別製の帙、または第四グループと同じ帙箱に収められている。

30・禪鳳筆「忠度」
31・〃「実盛」
32・〃「三輪」
33・〃「定家」
34・〃「当麻」
35・〃「東方朔」
36・〃「邯鄲」
37・伝禪鳳筆「当麻」
38・禪鳳本転写「人形之祈」
39・天文三年筆「初雪」
40・弘治二年喜勝筆「老松」
41・天正九年宴蓮筆「吾子胥」
42・善四郎本転写「雪頼朝」

以上いずれも巻子本。禪鳳の手に成る謡本と、それに準ずる貴重本の類である。

第三グループは、宝山寺前管長が、床の間の掛物に用い得る文書など若干を選んで別製桐小箱に収めて置かれたもので、次の通り。

43・文政五年筆「秀吉公北野大茶湯高札」
44・安住筆「秀吉公北野大茶湯高札」
45・百番謡本に関する書付
46・享保十三年氏綱筆小謡「曙」
47・吟松斎（鳥飼）宗昕書状
48・安住筆「諷十徳」
49・文化三年安住筆源氏供養等仕形
50・願書・起請文粒付
51・承応二年筆井門流兵法目録
52・安住筆短冊
53・文化二年安住筆小謡「福の神」
54・文政十三年安住筆小謡
55・安住筆和歌書付
56・道成寺乱拍子足使ひ方書付
57・元禄十年梅木善三筆太鼓頭付
58・高砂次第書付
59・氏綱筆小謡「鼓滝」
60・雨月・定家・角田河書付

以上18点は、57が折本一冊である他は、いずれも一通ないしは一枚のもので、47以外は格別に貴重なものは含まれていない。

第四グループは、慶長頃の金春大夫で兵法を好んだ金春氏勝の頃に集められた兵法の伝書で、直接能楽とは関係のない文書である。これも近年補修を加え、第二グループの大半とともに帙箱入りである。

61・慶長四・七年宝蔵院胤栄自筆伝書
62・慶長七年氏勝筆兵法伝受事目録
63・慶長六年柳生石舟自署「新陰流兵法目録事」
64・慶長七年柳生但馬署名新陰流免許状
65・慶長六年柳生但馬署名「新陰流兵法目録事」（63とは別）
66・慶長七・九・十一年奥書柳生但馬伝書
67・慶長六年筆「大坪流手綱之目録」
68・慶長七年筆「当流長太刀大事」
69・慶長七年筆「新当流長太刀大事」
70・慶長六年柳生但馬署名兵法道歌
71・慶長七年勝筆鎗術伝書
72・慶長二年宮本無二助伝書
73・慶安二年筆「仰五身伝」
74・慶安三年筆柔術伝書

以上74点が宝山寺に残される分であり、その他の文書が能楽研究所に寄托されるのである。貴重本のほとんどは宝山寺に残るわけであるが、寄托分にも、金春喜勝の自筆謡本を筆頭とする多くの謡本、室町末期以後成立の伝書類、記録・由緒書・書状等の諸史料、その他興味深い文書が多数含まれている。それらの中の主要なものについては、今後この誌上にも時々紹介し、短いものは翻印も試みたいと思っているが、今回はとりあえず寄托の事実のみを報告しておきたい。なお、宝山寺文書の目録は、昭和31年に私が作成したものが能楽研究所にあっていつでも利用できることをも附言しておきたい。

（41・2・23）